

○残業などに悲鳴を挙げる官僚 NHK クローズアップ現代(R6.6.11Tue 19:30~19:57)

官僚 28 万人 作業内容~政策立案、予算書作成、答弁書作成、国民への周知など

22 年度月 100 時間超の人が 5,500 人 10 年間で官僚志望者約 3 割減

退庁 24~25 時になる。霞ヶ関にタクシーが並ぶ。

・30 歳代女性の事例 東北での原発事故対応 100 超の資料作成で、日中はトラブル対応に時間がとられ、月 135 時間超の残業でうつ病になって退職

・国家公務員には人件費抑制へ定員がある。仕事量が増え、人手不足、ある人は同期の 1/3 が退職。

経産省の仕事効率化対応 ペーパーレス化 昔はプリンター待ちに 1 時間 上司とモニターで打合せ 子ども家庭庁 子育て休暇取得 男性の育休取得

若手官僚 4 人座談

・法文作成に時間かかる。平日は母子家庭の感じ。仕事量が多く政策立案に時間がかけられず、国民へのサービスに疑問が残る。準備不足で、外国との交渉に 1 文が足りずわが国に不利になっているかも。

官僚定員についての整理

・官僚が大変であることが国民に届いていない。

・人数は 1960 年代に定年制。1990 年以後仕事少なくするために、なるべく地方自治体や民間に任せることにした。

・21 世紀にグローバル化、少子高齢化が進み、仕事量が増え、一人当たりの仕事量が増加傾向にある。

・働き方では、民間の場合労基法があって 1 か月などの残業規制があり超過すると罰則があるが、官僚には罰則が無い。

・特に負担なのは、国会、政治家への対応だ。国会質疑対応へ夜中 2 時ころまで霞が関は明るい。予算委員会の答弁書を作るなど。国会会期中の霞が関付近の夜間照明は通常時の 20 倍増。

令和 5 年 9 月に「官僚の仕事の効率化」が提言された。

・想定質問の提出を 2 日前を求めているが実際は 1 日前が多く、未明作成が増える。

・人事院は、質問事項の日程を通告している。オンラインレクチャーが提案されているが活用は 6.8%にとどまる。議員は電話すれば 10 分で官僚が自分の事務所に來るのが当たり前だと思っている。

野田聖子氏の主張

・力関係(官僚は議員の下請)があり、地元への挨拶文まで官僚に頼んでいる議員もいる。

・大臣の答弁能力が低いと、想定問答の回答が多く必要となる。

・官僚の目指すべき姿 作成した法案が現場に役立つとうれしい。それを現場で確認する余裕が必要だ。

○官僚に何が志願者減少・辞職も・・・政治主導で生還関係は今後の官僚の役割とは NHK 日曜日討論 (R6.6.16Sun 9:00~10:00)

(視聴者の声) 40 歳代 大臣説明資料作成で朝 5 時、継続勤務。昼間議員から急な政策説明資料要求。

川本人事院総裁 10 年前に比べ職員が減っている。人生観、仕事観が変わってきている。昇進に拘らず、家庭を大事にしている。管理職に人材育成へマネジメント力が求められている。

待鳥京大教授 仕事への満足度、給料等の待遇が民間に比べて見劣り。更に無駄な国会対応。

60 年代に定員が制限され、その後業務量の増大、グローバル化、少子高齢化の中で人が少ない。

小林元経産省 10 年前に入省したが若い時から業務上の決定権があってやりがいがあった。

(視聴者の声) 国民からの要望への回答や陳情への対応の仕事も多い。

大島元衆議院議長 政治主導が言われ、陳情に対しては副大臣、政務官が機能するはず。国民へのサービスを数字では表せない。行政改革が叫ばれた頃予算が 80 兆円、今は 100 兆円で行政官は大変。

松井京都市長 官僚は分析等に注力すべきで、給料や仕事環境に見直しが必要だ。

地方の官僚も同様だ。

川本 時代環境(インフラの拡大、業務の効率化等)が変わり、退職で減った人の分まで頑張っている。

松井 政治主導は、政治家が責任を果たし、政治と行政の役割分担が必要で官僚が政策に注力できる

環境が必要だ。

川本 変化の激しい時代なので、**官僚のモチベーションづくりが必要だ。**

(視聴者の声) 人手不足。慢性的な業務過多。社会のニーズ増。働き方の先が見えない。

小林 今の時代、担い手は官でも民でもよい。誰か気づいた人がやる、ゼブラ企業が理想だ。

松井 多様な専門の人材を入れるなど、行政の体制、公務員の採用の仕方を変える必要がある。22歳で官僚一筋ではなく、**中途の専門人材を採用する仕組みをつくるべきだ。**

川本 災害支援や技術の進歩に合わせて官民の相乗効果を期待して、**中途採用を進めている。**

(視聴者の声) 募集しているが、給料や待遇で折り合いがつかない。

松井 **総理が陣頭指揮で改革を進めるべき。**

大島 **政治課題として議論すべき。**

待鳥 **政治がリードし国民の関心のもとで進めるべき。**

川本 応募者が減っており法整備をすべき。

#### ○川本 人事院総裁 インタビュー (読売新聞 R6.6.17Mon4 面)

- ・国家公務員のなり手不足に、「**実態以上にマイナスイメージが広がり、若者が忌避観を強めてしまわないかを懸念している。**健康やハラスメント対策に力を入れてイメージ改善を図りたい。」
- ・**国家の屋台骨を支えるオンリーワンの仕事だが、魅力がうまく伝わっていない。**何も広報しなくても優秀な人たちが自然と集まっていたので、ちょっと油断していた。
- ・**重い負担につながる国会対応は、(行政)の自力だけでは(解決)は難しい部分があり実態を調べる。**
- ・**若者の意識が変化し、転職が前提になっており、新卒採用だけでなく、経験者採用や退職した元職員を再雇用する「アルムナイ採用」を重視する。**
- ・国家公務員の総合職採用試験の申込者数は2012年度の約2万人から、**約10年で3割減った。**採用後10年未満の若手の退職者数も18年度に116人でその後も高水準だ。

#### ○施工の神様 土木学会若手パワーアップ小委員会 IV 記事 「土木を辞めた人、戻ってきた人インタビュー」 2017.12. 1 (土木の日) ~2018.11.07 元国土交通省職員 (現(株)大和証券) 提言

- ・入省5年目に山形県庁の事務系行政職に転職、在職中に公認会計士試験に合格
- ・**国交省の魅力は、自分の意思をインフラの在り方に反映させ、自分の社会貢献の結果が直接見える。**
- ・国交省に5年 初年度本省大臣官房で主に土木技術調査を担当、東北地整後本省に戻って道路局と港湾局にそれぞれ1年在席し、道路局ではITSを、港湾局では港湾法の防災関係の法改正を。
- ・若手はほぼ全員1~2年で異動を繰り返す(若手に幅広く経験を積ませる)
- ・肉体的にも精神的にもかなり厳しかった。特に最後は、港湾局の1年は港湾法改正作業をしながら、**通常の係長としての業務も行い、霞ヶ関用語で「半タコ(半分タコ部屋)」と呼ばれる状態での激務。**今の自分があるのは、あの時の5年があったお陰と感謝している。
- ・**仕事のやりがいは非常に大きい。**特に日本の社会インフラ整備に関する全ての意思決定過程を総覧することができるのは大きな魅力だ。それに、情報処理能力や文書作成能力、何より利害調整能力や日本的なバランス感覚をOJTで身につけることができ、**短期間で急成長することができる。**
- ・業務に関する具体的な意思決定や政策立案ができるのは、本省なら課長補佐で、20代後半から30代前半なので、民間企業に比べるとそれでも若いと思うかもしれない。
- ・**肉体面で辛かったことは、係長時代で、単純に業務量が多い長時間残業と、「国会待機」**のような、自分の努力ではどうにもならない長時間拘束で、睡眠時間が相当削られた。
- ・**精神的に辛かったのは、上司と利害関係者(主に関係省庁)との間に挟まれ、上司に「うちの主張を通すまでは帰って来るな」と怒鳴られ、利害関係者の担当者からは「そんな主張は絶対飲めない」とすごまれ、全員が苦しみ、夜も寝る時も休日もこの調整に関わる諸々が頭から離れなくなる。**相手も辛いと感じれば、仲良く情報交換し、妥協案を編み出せるようになる。
- ・**国交省の技官は、退職まで2~3年ごとに全国中転勤生活**で時には海外も。子供が小さいと家族で転居だがその後は単身赴任となる。**本省勤務の時、家内はワンオペで育児負担が大きい。それが退職まで続く。技官のままで一生は難しいと思い、5年目結婚を決めた時点で転職を決断した。**
- ・国交省は良い職場か? 国交省が嫌いで辞めた人は少ないと思う。国交省は自分の土木技術者としての社会貢献や使命感を心行くまで満足させてくれる職場、ハイレベルなOJTで自分を急成長させてくれる職場だ。今でも大学生の皆さんには国交省を推薦している。